



Title	討論を終えて
Author(s)	鹿野, 由行; 中西, 美穂; 中山, 良子
Citation	日本学報. 2015, 34, p. 57-60
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/51379
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

討論を終えて

方法論の会を終えて、十分に議論をできなかった論点について院生に意見を尋ねたところ、会を準備してきた院生たちが更なるコメントペーパーを提出してくれた。議論を深めるのに有益だと考えられるので、以下3名の意見を紹介したい。

① 鹿野由行 「[木村さん] から見える性[行為]」

方法論の会のコメントでは触れられなかった点についてあらためて書かせていただき、大変感謝しています。

事前の打ち合わせでは、高嶺さんは「誰と共に生きるか——生き延びるための表現」として3.11以降の問題を中心に上げられる予定であったため、講演の最後に上映された自身の映像作品である「木村さん」について十分にコメントすることができなかった。作品についてここでは詳しくは触れないが、森永ヒ素ミルク事件の被害者である身体障害者の木村さんの自慰を高嶺さんが介助するという内容になっている。この作品は多くの物議をかもしたが、その中の「恋愛感情はないのか？」という問に対し、高嶺さんは「友情」が近いとしてそれらを否定している。

この作品における自慰の介助という行為はどのように考えることができるのだろうか。両者の行為に対して恋愛感情の有無を問う質問は、事実上二人のセクシュアリティを問うているのと極めて近い。

このような問いが立てられる背景には、現在私たちが考えるセクシュアリティ概念がアイデンティティに基づいて構成されていることが根底にあるだろう。つまり同（両）性愛行為を行う者は同（両）性愛者である、というわけである。だが作品を見ても分かるようにそのような図式は成り立たない。

性風俗の一つに、「ウリ専」と呼ばれる男性同（両）性愛者向けの風俗店がある。客は気に入ったボーイを選ぶことができるのだが、各ボーイの紹介文には身長や体重などの他にセクシュアリティの項目がある。そこには「ゲイ」「バイ」「ノンケ」のいずれかが書かれているが、この「ノンケ」とはヘテロセクシュアルであることを指す。つまり、ノンケのボーイを選んだ場合、客はそのボーイと性的行為が可能となるが、しかしボーイはあくまでもノンケなのである。この両者の関係は「同性愛（的）行為」と呼べるだろうか。

介護の現場において「介助者手足論」と呼ばれる「介助者は障害者にとっての道具、あ

討論を終えて

るいは手足の延長」とする考えがある。つまり手足の主体は障害者にあり、障害者の意思に基づいて手足が動かされていく。

だが、「木村さん」の中で高嶺さんは木村さんの性器だけではなく乳首を弄るという、性的サービス(?)も加えていく。「木村さん」の中に登場する高嶺さんも、「ウリ専」のノンケボーイも、合意が形成された上で異性愛者として誰かの「手足」以上の意味を持ち行為しているのである。

これまで性にまつわる行為は、その対象の性別によって常に主体のセクシュアリティが、暗黙の了解としてなかば勝手に断定されてきた。しかし、行為とアイデンティティに基づく主体のセクシュアリティとは本来分けて考えなくてはならない。むしろ、行為に基づく関係性に対して新たに名称が想起されるべきなのかもしれない。いずれにせよ、性的アイデンティティと切り離して性的行為による名称や行為そのものを巡ってはこれまであまり議論さえされていないのではないだろうか。

「木村さん」の中にある性的な「行為」は、ただの介助と呼ばば両者の関係性は抜け落ちてしまい、友情と呼ぶには性的であり、二人のセクシュアリティから同性愛者とする 것도できないのである。この行為主体のあり方を今一度私たちは考える必要がある。

もし、木村さんと高嶺さんがホモ(バイ)セクシュアルであると答えた瞬間、自慰の介助は「愛のある性行為(セックス)」と読み直され、作品は「愛の物語」として美化されたのかもしれない。

(しかの よしゆき 大阪大学大学院文学研究科博士後期課程)

② 中西美穂 「〈ノスタルジア〉と距離」

佐藤守弘先生が紹介された、篠山紀信が横尾忠則を撮影した写真の中の、嵐寛寿郎や、幼馴染たちのことが気になりました。講演時に、上手く言葉にできませんでしたので、ここに感想という形で述べたいと思います。

写真の中の嵐寛寿郎の本格的な見得を切る姿も、幼馴染みたちの満面の笑顔も、どちらもそれが主題ではなく、本格的な姿や満面の笑顔から距離を取っている横尾忠則の姿が主題のこの写真に、私は違和感を覚えました。鞍馬天狗の出で立ちの横尾が嵐の横で白けている、あるいは自分なりの今のスタイルで故郷の思い出の場所に数歩下がって立つ横尾の姿に、彼の強い自己主張のようなものを感じました。また同時に、その横尾の引き立て役

討論を終えて

でしかないのに、本格的、あるいは満面という、力いっぱいの現在を写真の中で担う嵐や幼馴染たちの姿に滑稽さを感じました。そして、その滑稽さを感じた鑑賞者の自分に、居心地の悪さを感じました。

このような鑑賞者側の違和感や居心地の悪さを、嵐や幼馴染たちの視点や、「距離」や「ノスタルジア」と関連させて考察するとどうなるのでしょうか。

十分な考察に至っていないのですが、現時点で考えていることを述べます。例えば撮影中の嵐の姿は、彼自身が過去に演じた役柄の記憶からであったとしても、撮影時の彼自身の現在の身体から生まれている動作である。映画スターであった嵐が、過去にそのような動作をしていたらどうかは周知のことなので、写真の中の彼の動作は過去のものだと、鑑賞者は見る。しかし、彼の身体から生まれる動作は、撮影時の現在のものであり、また、その後においても、つねに彼の身体から生まれる動作は、過去を模したものであっても現在だといえる。もしこの写真撮影中に、嵐の身体の動作が過去を現在に呼び起こす、例えば、自分は今も現役映画スターであると言い張ったとしたらどうなるのか。「年取ってボケてる、現在と過去がわからなくなっている」と、彼の現在と過去の捉え方を奇異な状態としてとらえるのか。それとも、過去と現在は異なる位置や層にあるとは限らないと受けとめるのか。過去と現在に距離を感じることは、ある一方向からの視点でしかない。それこそが写真表現なのかもしれません。しかし、他の方向からの視点ではどのような考察が成り立ちうるのか、それが気になります。そこに私が感じた居心地の悪さや違和感の正体が見つかるのではないかと考えています。

(なかにし みほ 大阪大学大学院文学研究科博士後期課程)

③ 中山良子 「グレーゾーン」

私自身は現代美術にまったく詳しくない。けれど高嶺格の作品からは、既存の考え方・語られ方に疑問符を投げかけ——例えば『木村さん』なら「障害者」や「性」に対して——、ああでもない、こうでもない、と思考する高嶺格自身が感じられる。それは、分析対象と出会い、文脈に寄り添いながら読み直し、論をたてるという日本学でよく見られる作業と似ている。私は勝手に親近感を感じている。

だからこそ、方法論の会で高嶺が言及した「衆議院選の結果」と「グレーゾーン」という言葉に私は引かれた。会では日常の買い物の場面を切り取る形で放射能の問題を扱った作品、『ジャパン・シンドローム～山口編』の一部を見た。作品では、魚屋に魚を

討論を終えて

買いに来た購買者と魚屋の従業員との魚の放射能の汚染をめぐる会話が、演者によって再現されていた。購買者を演じる女性が、放射能が気になるという類の発言をすると、従業員役の男性は「政府」が「大丈夫」といっていると述べ、にこにこ「大丈夫ですけん」と繰り返していた。

子どもの給食の食材の産地を毎日確認し、飲食店で食材の産地を確認する日々が続く私にとって、この作品は、私自身の歯がゆさ、手ごたえのなさ、憤り、私自身が置かれている原子力や放射性物質をめぐる政策状況、を俯瞰して見せ、冷や水を浴びせかけられたような気分させる、強く、鋭い作品である。

高嶺は『ジャパン・シンドローム～山口編、水戸編、関西編』の次作品の制作にあたり、「衆議院選の結果」を受け、「グリーゼーンに向けてという状況ではなくなった」として、『ジャパン・シンドローム～ベルリン編』を制作したと述べた。

私はこう尋ねたかった。高嶺が「グリーゼーン」と呼んだ人／対象は誰なのかと。高嶺格の作品が具体的な対象や概念との真摯な対話で生まれてくるとするならば、「衆議院選挙の結果」から「グリーゼーン」の動向がわかる、という想定はあまりにも乱暴に思える。私はここにいるが、「衆議院選挙の結果」からは私は見えない。選挙で民意が確かめられた、などという政治家の恣意的な言葉使いのために、「衆議院選挙の結果」があるのではない。けれども、現行の選挙制度が、私達一人一人の原発政策に対する態度を浮き彫りにするような制度として成立しているとも思えない。

「衆議院選挙の結果」によって立ち現れるような「グリーゼーン」の動向は、私にとって具体的な輪郭を持たない。対話すること、問い直すことが重要であるのであれば、「衆議院選挙の結果」から把握される「グリーゼーン」を持ち出すことは、そもそも作品の制作の文脈にそぐわないのではないのかと考えるのである。

(なかやま よしこ 大阪大学大学院文学研究科博士後期課程)